

試験区分	一般選抜	○	科目	論述	<table><tr><th colspan="5">受験番号</th></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>	受験番号									
	受験番号														
	現職教員選抜	○													
	外国人留学生等選抜	○													
派遣教員選抜	✕														
特別選抜	✕	対象	学校教育課題サブプログラム												

問 1

図 1 は、児童生徒の文化的階層別に、子どもたちがどのような授業を「受けたい授業」と回答したかを示している。図 1 を見て、以下の 3 つの問いに日本語で答えよ。解答欄は次ページにある。解答欄が不足する場合は、解答欄の裏面も使用してよい。

- (1) 児童生徒はどのような授業を受けたいと思っているか。児童生徒の文化的階層との関連に注目して、図 1 から読み取れることを述べよ。
- (2) (1) で述べた点について、その理由について考察せよ。
- (3) (1) (2) を踏まえて、教師が教育実践を行う際に留意すべきことを具体的に論じよ。

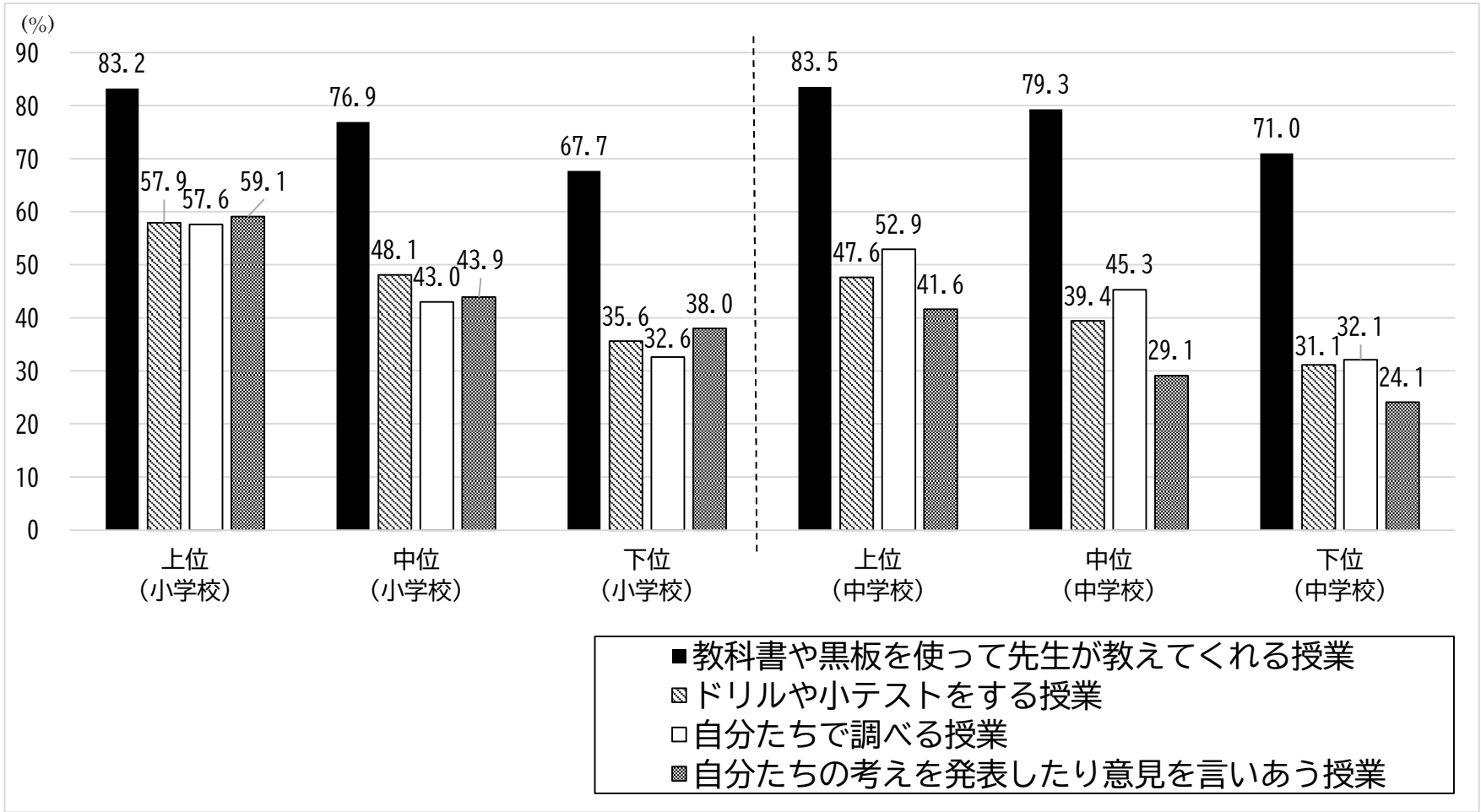


図 1 文化的階層別にみた児童生徒の「受けたい授業」

注1) 「次のような授業を受けたいですか」と尋ね、「とても受けたい」「まあ受けたい」「あまり受けたくない」「まったく受けたくない」の 4 つの選択肢の中から 1 つ選択して回答してもらった。数値は、「とても受けたい」または「まあ受けたい」と答えた者の割合 (%)。2001 年に大阪府の小 5 児童 921 名、中 2 生徒 1,281 名を対象に行われた質問紙調査に基づく。

注2) 児童生徒の文化的階層は、家庭の文化的環境について尋ねる質問項目を用いて合成されたものである。「家の人はテレビでニュース番組をみる」「家の人が手作りのおかしをつくってくれる」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(以上 4 点尺度)、「家にはコンピュータがある」(2 点尺度)といった質問項目への回答をもとに、小・中学生のそれぞれに主成分分析を用いて、家庭の文化的環境を示す一元的尺度を作成した。この尺度を用いて、小・中学生のそれぞれの調査対象者の数がほぼ 3 分の 1 になるように、3 つの「文化的階層グループ」を構成した。本図では、文化的階層が高い順に「上位」「中位」「下位」と表記している。

(出所：荻谷剛彦．“「学力」の階層差は拡大したか” 荻谷剛彦・志水宏吉編．学力の社会学：調査が示す学力の変化と学習の課題．岩波書店，2004 年，p.132 のデータをもとに作成。)

試験区分	一般選抜	○	科目	論述	<table><tr><th colspan="6">受験番号</th></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>	受験番号											
	受験番号																
	現職教員選抜	○															
	外国人留学生等選抜	○															
派遣教員選抜	✕																
特別選抜	✕	対象	学校教育課題サブプログラム														

【解答欄】

<解答のポイント>

問 1

(1)

グラフを適切に読み取ることができていればよい。以下のようなポイントが考えられる。

図 1 から、学校段階や児童生徒の文化的階層を問わず、伝統的な「教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業」を肯定する意見が最も多いことがわかる。それにくらべると、「ドリルや小テストをする授業」「自分たちで調べる授業」「自分たちの考えを発表したり意見を言いあう授業」は、子どもたちに「受けない」と思われていない。

次に、児童生徒の文化的階層による違いに着目すると、いずれの学校段階でも、文化的階層が高いほど、様々なタイプの授業を「受けない」と回答する傾向が高まる。それにくらべて、文化的階層が「下位」の児童生徒は、「ドリルや小テストをする授業」に対して消極的なだけでなく、近年推奨されている「自分たちで調べる授業」や「自分たちの考えを発表したり意見を言いあう授業」を「受けない」と思う割合も低い。このことから、文化的階層が「下位」の児童生徒は、教師が教えてくれる伝統的な授業だけでなく、むしろそれ以上に、自由度が高く主体的な参加が求められる授業を好まない傾向がある。この傾向は、小学校よりも中学校でさらに顕著に見られる。

(2)

児童生徒が「受けない」と思う授業に関しては、文化的階層による差が生じている理由が考察されていればよい。たとえば以下のような論点が考えられる。

「ドリルや小テストをする授業」は、多くの場合、児童生徒が個別に取り組むものであり、個々の自宅学習量や通塾経験等がドリルの進捗や小テストの点数に反映されると考えられる。また、「自分たちで調べる授業」「自分たちの考えを発表したり意見を言いあう授業」についても、児童生徒のパフォーマンスが、家での調べ学習や保護者の支援を前提とするものになっていたり、家庭の文化的環境の違いによって左右されたりする可能性がある。つまり、学習内容や教育方法が、そもそも文化的階層が「上位」の児童生徒にとって有利なものとなっている場合、図 1 に見られるように、「下位」の児童生徒がこうした授業を好まない傾向が生じると考えられる。

(3)

教育実践において忘れてはならない視点の 1 つとして、教育格差への配慮がある。たとえば、「効果のある学校」に関する研究は、厳しい家庭環境にある児童生徒の学力の底上げに成功している学校に注目し、教育格差の縮小に効果のある教育実践の特徴を明らかにしてきた。日本では、協同的な学習集団づくりと同時に、学習が遅れがちな子どもにこそ手厚く、補充学習や家庭訪問等が行われていることなどが、その特徴として報告されている。

図 1 は、2001 年のデータに基づくものだが、現代においても示唆的である。文化的階層の低い児童生徒にとっては、近年推奨されているアクティブラーニングで重視されるような授業スタイルも不利に働く可能性があることには留意が必要であろう。その上で、すべての子どもが主体的に参加でき、深い学びが得られるような学校教育のあり方について検討されていることが望ましい。

その他にも、(1) と (2) の解答を踏まえて、教師が教育実践において留意すべきことについて、各自が有している研究知見や教育経験などにもとづいて具体的に論じられるとよい。

試験区分	一般選抜	○
	現職教員選抜	○
	外国人留学生等選抜	○
	派遣教員選抜	✕
	特別選抜	✕

科目	論述
対象	学校教育課題サブプログラム

受験番号					

問 2

PISA（Programme for International Student Assessment）は、国際的な学習到達度に関する調査である。この調査は OECD（経済協力開発機構）が 2000 年から実施しているものである。調査の目的は、義務教育修了段階の 15 歳の生徒が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測ることである。この調査の考え方を活用して、教師は特別活動と総合的な学習（探究）の時間をどのように指導したらよいか。日本語で具体的に答えよ。なお、解答の際に想定する学校種（小学校、中学校、高等学校）を明示すること。解答欄が不足する場合は、解答欄の裏面も使用してよい。

【解答欄】

<解答のポイント>

問 2

- ・ まず、特別活動で集団活動やその一環としての体験的な活動を通じて社会性や人間関係を育むことを具体的に説明できること。
- ・ 次に、総合的な学習（探究）の時間で、自ら課題を見つけ、主体的に判断し、問題解決を図ることを具体的に説明できること。
- ・ さらに、PISA の考え方を活用して、知識や技能を、生活の様々な場面で直面する課題に対して、どの程度活用できるか論じられること。
- ・ 以上の点を踏まえて、教師がどのような指導を行ったらよいか具体的に論じられていること。